
春、桜の下で

yuris

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春、桜の下で

【Nコード】

N4530S

【作者名】

yuris

【あらすじ】

桜が咲く、次の次の年にまた会いましょう。

「好きなんだ、お前のこと」

その一言に、涙が出そうになった。

もう私はこの国からいなくなるというのに。もうあまり会えなくなるというのに。

こいつは今更、何を言っているんだか。

私は勉強だけは無駄にできた。そこらの地域ではちょっとした有名な人だったのだ。

あそこの小学校には『稀代の天才』がいると。

勉強だけならそこらの社会人よりできる自信がある。三年生の時は高校生が受けるエリート試験で一番になったし、そしてついこの前、アメリカの大学に受かったばかりだ。

親や教師は大喜びだ。それなのに、私は喜べない。

私は世界や大人の汚さを知っている。地位、学歴、名声――そんなもので人間の価値を決めるのが大人という生き物だ。私だって学校では優遇される特別な存在。

そんなものいらぬのに。私は普通で良かったんだ、天才でなくとも普通の小学六年生で。

それでも、あいつに出会えたから私は私のままでいられたんだ。

「へー。大学受かったんだ」

「うん。……驚かないんだね」

「別になんとも。それだったら昼ドラでハナコがミサエ殺しちゃった方が驚いたな」

「誰よそれ」

私の部屋で我が物顔で雑誌を読んでいるこいつは、我が幼馴染の琉斗。幼い頃は一緒によく遊んだものだ。その頃は私も勉強はしてなくて琉斗も昼ドラなんか見てなくて、可愛らしいガキだった。

そう。本当に何も知らない、可愛いガキだったんだ。

「ねえ琉斗、時間ってどうやって形成されているのかな」

「さあねえ。パラパラ漫画みたいに何枚も重なってできてるんじゃないの」

こいつは私と唯一会話できる子供だ。私は突拍子もなくこんな哲学的なことを言い出すからそこの小学生は理解できなくなるし、そもそも私は琉斗以外と話したがない。

まあ要するに琉斗も頭は良いわけだ。

それなのに私と違って他の人と上手くやっていけている琉斗は、本当にすごいと思う。だからこそ私はこいつに懷いたわけだが。

最近、漸く感情というものが芽生えてきてくれた。それも厄介でしかない“恋”ってやつ。

辛くて悲しくてむず痒くて、それでいて嬉しくて楽しくて美しい。

なんと不思議な感情だろう。私には到底理解できないもの。

それを、琉斗は私に教えてくれた。

私が知らない、彼の知っていること。

それがなんだか悔しくもあったけれど嬉しくもあった。

「琉斗。私ね、アメリカに行こうと思う」

「ふーん。……………えっ!？」

突然寝転がっていた琉斗がガバッと上半身だけ起き上がらせる琉斗。驚いてくれたのがちょっぴり嬉しかったり。

「うん。今度会うの、いつか分かんない」

「そっかそっか、大学通うのか。ふーん、へえ…………」

私に向けてくれるその目は、幼馴染としての寂しさ? それとも――。

庭では、桃色の蕾がもうすぐ咲き誇ろうとしていた。

「…………桜、もうすぐ咲くね」

「そうだなー」

そして、日本を発つその日。琉斗は見送りに来てくれた。

学校だっであっただろうに。もうすぐ琉斗も卒業するんだし。

「どうして見送りに来てくれたの？」

「別に理由なんてねえよ。学校さぼる口実にできるからな」

「そっか。でも嬉しい」

琉斗のことはもう諦めるつもりだ。幼い頃から漠然と抱いてきたこの想いだけど、いつまで経ってもこんなこと思われてたら琉斗も迷惑だろうし、なにより自分の気持ちに踏ん切りを着けたかった。

琉斗だって好きな人くらいできる年頃だから、私は邪魔でしかない。それでも、見送りに来てくれるなんて、また期待するだけなのに。琉斗って本当にバカな奴。

「もうそろそろだから。行く」

「っ……、あのさ！」

「……？」

咄嗟に私の右手首を掴んだ琉斗。何故だか、琉斗に掴まれたところだけ、熱い。

琉斗のことはもう諦めるつもりなのに。

「何も、ないなら」

「あるよ、あるある！ 大アリだ！」

いけない。振り返ってはいけない。きっと琉斗の顔を見たら泣いてしまう。

あまり泣いたことがない私が一人の男子のために泣くなんて、嫌だ。それ以上言っただけいけないけれど、その続きが聞きたい。

ああ、矛盾するココロ。

「好きなんだ、お前のこと」

躊躇いながらも紡ぎ出された琉斗の言葉は、甘くも私を苦しめた。もう、なんで今言うの。もうちょっと早かったら、もっと一緒にいられたかもしれないのに。

臆病な君と私。

「……それだけなら、私行くから」

琉斗の手をしゅるりとすり抜け、私は飛行機に向かって歩いた。こ

ここまでれば琉斗も追ってこれまい。

私は呆然と立ち尽くす琉斗に振り返り、涙でぐちゃぐちゃになった顔を晒した。

どうか神様。琉斗にこの想い、届きますように――。

誰に聞かれても構わないから。とにかくあいつに届けてほしい。

「二年！ 二年で絶対、帰ってくるから！ 琉斗んここに、帰るから！」

「……へ？」

「桜が咲いて、散って、咲いて、散って、また咲く頃！ 絶対琉斗の隣にいるよ！」

「……おう！ 絶対待ってっからなー！！！」

きつと、二年後の春に。

また桜が満開に咲く頃に、琉斗の隣にいるのが私でありますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4530s/>

春、桜の下で

2011年10月8日20時53分発行